DOGDAYS～音速のハリネズミ、フロニャルドを駆ける～

ポッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＯＧＤＡＹＳ～音速のハリネズミ、フロニャルドを駆ける～

【Ｎコード】
Ｎ１１６７Ｕ

【作者名】
ポッキー

【あらすじ】
Ｈｅｙ！　俺の名はソニック。ソニック・ザ・ヘッジホッグ！
今日もまたエッグマンの機械どもから逃げているんだが、数が多くてきりがない。
カオスエメラルドを使って、カオスコントロールで逃げてやるぜ！
そしてみごとに逃げたんだが・・・ついた場所は何と別の世界だった！？Ｏｈ，なんてこった・・・
だが、何やら面白いことをしているようだ。アスレチックもたくさんあるようだし。

よし、この世界で少し暴れてやるか！

エピローグ（前書き）

このたび、『ＤＯＧＤＡＹＳ』と『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』のコラボ小説を書くこととなった、ポッキーと申します。
なぜこの作品を書くことになったかというと、ソニックがアスレチックのようなコースを全力で走る姿をゲームで見ていて、「同じアスレチックつながりで、ＤＯＧＤＡＹＳに登場させたらどうなるんだろう？」という発想から生まれました。
頑張って書きたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

エピローグ

エピローグ：音速のハリネズミ、異世界に飛ぶ
建物の明かりが夜を照らす、どこかの世界の一つの町。
〜ソニック、今日こそ貴様の息の根を止めてやるぞ！〜
「へっ、そんなウスノロの機械で留められるもんならな！」
空中に浮かぶスクリーンに、一人の科学者の姿が写る。
その言葉を聞き、青いハリネズミは夜の街を走る。
その動きは、まさに音速。「ソニック」の名に恥じない動きだった。
彼の動きは肉眼でとらえるのは難しく、青い閃光となっているほどだ。
彼の名は、『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』。世界を幾度となく救ってきた英雄であり、冒険家でもある。
時にスライムの様な化け物から、はたまた憎しみから生まれた生物から。本の中の怪物とも戦った。
ちなみに、この科学者は『Ｄｒ．エッグマン』と言い、ソニックのライバルであり、マッドサイエンティストだ。
毎回悪事を働いてはソニックに邪魔されるという、別のゲームで言えばク○パのような存在である。
〜わしはあんなふうに火を吐いたりはせんぞ！〜
おっと、こちらの声が聞こえていたようだ。
「さーて、鬼ごっこも飽きたし・・・ここでおさらばさせてもらうぜ」
と言って取り出したのは、緑色に輝く一つの宝石。
名前を「カオスエメラルド」。超強力なエネルギーを持つ宝石である。
そのエネルギーを使えば、世界征服、いやそれ以上のことさえできてしまうほどだ。
「Ｇｏｏｄ　Ｂｙｅ！」

そして、その宝石を掲げ・・・
「カオス・コントロールッ！」
「そう簡単に、逃がしはせんぞ！」
と、エッグマンは銃の様なものから小さなボタンの様な物をソニックに撃ち、それは本人に気づかれずにくっついた。
そしてその姿は、光とともに消えた。
これは『カオスコントロール』と言い、カオスエメラルドのエネルギーで時空をゆがめ、超高速での移動や空間転移を可能にする能力である。
「チッ、逃がしてしまったか・・・だが、発信器はついておるし、モニターを見れば・・・なんじゃとぉっ！？」
なんと、エッグマンの機械にあるそのモニターには・・・その世界のどこにも、その発信器の反応がなかった。
ただ、ソニックのいた場所には、少し強い風が吹き・・・そのままそこらのほこりを巻き上げて消えた。

「よっと・・・ふう、どうにか撒けた様だな」
エッグマンから逃げてたどり着いたのは、どこかの石台の上。周りには森が広がっていて、空気も澄んでいた。
「ゆっくりするのにはもってこいの場所だなぁ…ん？」
ふと、遠くから何かが爆発するような音が聞こえた。
「花火でもやってんのか…面白そうだなっ！」
そこめがけて、俺は自慢の足で走りだした。

これは、一匹の音速のハリネズミと、二つの国。そして、片方の国に召喚されてしまった一人の少年が織りなす、一つの物語である。
果たして結末は、ハッピーエンドか、それとも・・・
ＤＯＧＤＡＹＳ～音速のハリネズミ、フロニャルドを駆ける～
始まります。

「俺のスピードについて来れるかな？行くぜ・・・Ｒｅａｄｙ，Ｇｏ！」

エピローグ（後書き）

次回予告
ソニックは偶然ビスコッティとガレットの戦争に巻き込まれ、ビスコッティ側の一人の少女を救ったことから、そのまま戦闘員として戦争に参加する。
「俺の名はソニック、ソニック・ザ・ヘッジホッグさ！」
〜早い！早すぎる！なんなんだこのハリネズミはーっ！！〜
アスレチックを難なくクリアし、敵の兵を一瞬で倒す。
「面白い…我とひと勝負じゃ、ハリネズミ！」
「上等だぜ！」
ガレットの王女との対決、果たしてその結果とは・・・？
「あのー、僕って勇者だよね？」
「あれに比べたら、あっちの方が勇者らしいがな（断然かっこいいしな）」
次回、『その名はソニック』　フロニャルドを駆けろ、音速のハリネズミ――――
「次回も、全速力で突っ切るぜ！」

第一話：その名はソニック（前書き）

カオスコントロールで逃げた先は、今までソニックが見たことも、聞いたこともない世界だった。
とりあえず彼は、人がいるところ目指して走りだす。
第一話、始まります。

第一話：その名はソニック

第一話：その名はソニック
「うひゃー、これまた派手にやってるねぇ」
高台から見てみれば、その音が起きた場所では大量の人が戦っていた。
「今まで人間はたくさん見てきたが・・・犬の耳や猫の耳が生えているのを見るのは初めてだなぁ」
いろいろな世界を見て、たくさんの人や生物にあったが・・・こんな世界は初めてだ。
〔華麗に鮮烈に、戦場にご登場いただきましょう！〕
ふと、モニターの様なものに一人の少年の姿が写る。花火まで上がってるし・・・派手だねぇ。
「戦場、ってことは・・・なにかの戦い中、ってことだよな。でも、あんなアスレチックコースみたいなところで戦う話は聞いたことがない」
いくつもの世界を回って、いろいろな情報を聞いたから言えることだ。もしかしたら、まだ行っていない世界というだけなのかもしれないし、情報がないのかもしれない。
「とにかく、誰かに会ってここがどこだか聞くとするか」
と、言うことで俺は花火があったところを目指して走り出した。

「ちっ、ここまで数が多いと面倒だな・・・」
勇者はまだこちらにたどり着いてはいない。さっき登場の映像が流れたから、もうそろそろで来るとは思うのだが・・・
わらわらとやってくる兵を双剣でなぎ倒しながら、そんなことを考える。
それにしても今日は一段と兵が多い・・・今日でここを攻め落とすつもりなのか、ガレットは・・・

「はあっ、はあっ、はあっ・・・」
まずい、体に結構響いてきたな。一度体勢を立て直して―――
「やあああっ！」
しまった！完全に対応が遅れている。このままでは・・・
ごめんなさい、兄上。私はどうやら「ちょっとごめんよっ！」え？
なぜか私は、宙を飛んでいた。何者かの手によって。
「え・・・わあああああっ！？」
落ち着いてみれば、誰かが私を抱きかかえている。一体誰が・・・
まさか、勇者か？
そのまま地面に着き、ゆっくりと私は地面に下ろされた。
「大丈夫か？お嬢さん」
「あ、ああ・・・」
その姿は、青い体に針の様な頭。大きなブーツをはいた・・・人ではない『何か』だった。
「あなたは？」
「俺か？俺はソニック、ソニック・ザ・ヘッジホッグさ！」
そう言うと、前に駆けだした。
「女の子をいじめるとは、いい度胸してんじゃないの」
「だ、誰だお前は！？」
「だから、俺はソニックだって言ってんじゃないか。さっきから」
彼の前には、３０人ほどのガレットの兵士達。まずい、あのままではやられてしまう―――
「倒される準備は、いいか？」
『は？』
そう言うと、彼はボールのように丸まる。そして体の周りに光の粒子の様なものが集まってくる。
「Ｒｅａｄｙ・・・」
その瞬間、
「Ｇｏ！」
空気を一気に切り裂いたような音。土煙がひどい。い、一体何が起

こったんだ？
『にゃーっ！』
なんと、さっきの兵士が一気に猫球に変わってしまった。あの一瞬で！？紋章術を使った気配はない。それに、あのスピード・・・彼は何者なんだ？
「おわ！人がクッションに変わっちまった！？おいおい、こんな世界聞いたことないぜ・・・」
「だ、大丈夫です。あれは「けものだま」と言って、一定量ダメージを受けるとああなってしまうんです」
「あ、そうなのか。ありがとな、教えてくれて」
「いえ、さっき助けてもらったお礼です」
「そっか。そう言えば、君の名前は？」
「エクレール、エクレール・マルティノッジです。「エクレ」とみんなからは呼ばれています」
「じゃあエクレ、この戦いが終わったら、詳しいこと教えてくれ」
「わかりました！」

「あ、あれは一体何者でありますか？」
「わかりません・・・少なくとも、勇者ではなさそうですが」
突然現れて、エクレを救った青い姿の方。なにかを爆発させたような音は、ここまで響いていた。
〜あ、あれは一体何者なんでしょうね？バナード将軍〜
〜そうですね。どこかから現れたさすらいの旅人、としておいた方が、今の状態には正しそうですが〜
「俺はソニックだってのー！」
〜えー、彼は『ソニック』と言うらしいです！ビスコッティ側には、先ほどの攻撃で大量にポイントが入りました！これは逆転の兆しになるか？〜
「ソニック・・・『音速』という意味でありますね」
「音速の旅人、ですか」

モニターで見る、その姿。目にもとまらぬ速さで、目の前にいるあちらの兵士をバッタバッタとなぎ倒している。
「（これなら、みんなが『しょんぼり』しなくても済みそうですね♪勇者様もいることですし、今日は久しぶりに勝てそうです）」
ちなみに、その勇者様はというと・・・
「あー！倒す人がいないから全然活躍できないよー！」
と、叫びながら戦場を走っておりました。

「遅い遅い！」
ホーミングアタック、サマーソルト、ライトアタック・・・多種多様な技を使い、いろいろなアスレチックをくぐりぬけながら敵を倒していく。さっきエクレからルールを聞いて、頭にタッチすればさらにポイントが入ることから、ホーミングアタックをうまく使いながら進むようにはしている。
「ちょいとここらで、やってみるかな？」
向かってくる大量の兵士を見て、丸まって大きく跳ねる。
バウンドブレスの力もあって、体はどんどん上に上がる。
５回ほどすると、兵士たちの上５メートルくらいに上がる。
次に、フレイムリングの力を解放して・・・
「ファイアサマーソルト！」
一気に地面に突撃し、その衝撃波で兵士を倒す。炎もあるから、相乗効果で一気に倒せた。
得点差があるからな・・・どれだけ早く、効率的に、多く敵を倒せるかがカギだ。
「ま、まってー！」
「ん？」
後ろを見てみると、一人の金髪の少年がこっちに走ってきていた。
「ぜーっ、ぜーっ、ぜーっ・・・」
「Ｂｏｙ，こんなところでへばってたら俺のスピードにはついて来れないぜ？」

「だ、だって、早すぎるんですもん・・・」
「・・・君、さっきモニターに映っていた勇者か？」
「は、はい。僕の名前はシンク、「シンク・イズミ」と言って、この世界からは別の世界から『勇者』としてここに呼ばれたんです」
「はあ・・・」
まるで昔の俺だな。いきなり本の世界に飛んで、「カリバーン」と一緒に旅をしたっけか・・・
「そう言えばエクレは？」
「走りについて来れないと言って、後ろの方で戦ってます」
「まあ、仕方ないか」
現在周りには俺と少年以外はだれもいない。さっきのスピードブレイクのせいか、地面は少しくぼんでいた。
「あー、そうそう。俺に対して敬語は必要ないから。よろしく頼むぜ、シンク」
「こっちこそ」
と、握手をしようとした瞬間・・・なにかが近付いてくる気配がした。
「これは・・・ずいぶんと大物の様だな」
「犬姫が呼びだした勇者の活躍が見れるかと思ったのじゃが・・・思わぬ乱入者が現れたのでな。活躍、見せてもらった」
「俺の事かい？」
「ソニック、と申したな。貴様の実力、この身で確かめたいと思ってな」
「いいぜ。その前にまず名前を教えな」
「我の名は、「レオンミシェリ・ガレット・デ・ロワ」。ちなみに王女ではなく、閣下だ」
「ソニック・ザ・ヘッジホッグ。冒険好きのハリネズミさ」
「ハリネズミ、か・・・我の力、貴様に見せつけてやる！」
「上等だぜ！シンク、適当にそこら辺に落ちてる剣か何かを探してくれ！武器がないときつい！」

「わ、わかった！」
あいつが持っていた棒でもいいんだが、剣を使った経験があるから剣の方がいい。
今はとにかく、すきを見ながら攻めるやり方を考えるか・・・

第一話：その名はソニック（後書き）

次回予告
ソニックｖｓ　レオンミシェリ姫。二人の戦いの決着は、果たして…？
「獅子王、炎陣・・・大・爆・破ぁ！」
誰も立っていられないとされるその技は、ソニックを飲みこまんと向かってくる。
「おもしれえ・・・やっぱりこれくらいのスリルがないと！」
「ソニック！」
今回の戦争も終局に。果たして勝者は？
次回、『音速と協力と決着』。　フロニャルドを駆けろ、音速のハリネズミ――――
「次回も、全速力で突っ切るぜ！」

第二話：紋章と協力と決着（前書き）

ソニックｖｓ閣下。決着は果たして・・・？

今回は急いでまとめた感じです。そうするつもりはなかったんですが・・・

第二話：紋章と協力と決着

第二話：紋章と協力と決着

「はあっ！」

「あたるか！」

相手は巨大な斧を振り回してこっちに攻撃を仕掛けてくる。それをタイミングを見てかわす。スピンアタックを決めようとしても、乗っているダチョウみたいなやつがかわして、決めようにも決め切れない。

「（どうする・・・？カオスエメラルドはあるが、乱用して失敗すれば何が起こるかわからない・・・）」

本当にカリバーンがほしくなってきた。というか、剣が。

「ソニック！あったよ！」

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！」

投げられたのは、一振りの剣。ちょうど背丈に合うサイズだ。考えてくれたんだな、シンク・・・感謝するぜ！

「その剣で、何をしようというのだ？さっきから貴様の攻撃は見切られてばっかりじゃが」

「こう・・・するんだよ！」

腰に剣を構え、周囲のフロニャ力を体中に集めるようにする。使い方は少しエクレに教えてもらっているからな・・・後は、あれ（・・・）と同じようにするだけだ。

「これって、紋章術…？」

ふと後ろを見てみると、風が流れているようなマークが俺の後ろにあった。

体中に力がみなぎってくる感覚…いける！

「行くぜ、猫耳のお姫様あああああっ！」

そして、一瞬の間が空き・・・

俺は、名前の通り『音速』で突っ込んだ。周りの風景が瞬く間に変

わっていく。
「っ！？」
相手は驚いたように斧を構え、盾のようにした。
「はあああああっ！」
超高速での連続斬撃・・・これが、ソウルサージ。本来なら赤い妖精を集めるが、今回は違う。それに、前よりも力が上がっている気がする。
「くううううっ！」
「だあああああっ！」
そして、ソウルサージが切れ、俺は後ろに下がって距離をとった。
何度も攻撃をたたきこんだ斧は、ところどころが欠け、ほんの少しひびが入っているように見える。
「決め切れなかったか・・・だが、その武器で戦えるのか？」
「たわけ…我をなめるな！」
『たわけ』って聞くと、懐かしくなる。もしかしたら、この世界にいたりするんだろうか？
「どうやら我も本気を出した方がよさそうだな・・・行くぞ、ハリネズミ…いや、ソニック！」
「望むところだ！」

「はあああああ・・・」
まさか、この技を使うことになるとはのう・・・
地面に斧を突き立て、紋章術を発動する。
「獅子王、炎陣っ！」
その言葉と同時に、周りから炎の柱が立ち始める。
「Ｏｈ・・・どうやら、これはまずい感じかな？」
「そんなのんきに構えてるつもり！？急いではなれないとやばい感じだよ！」
次に、空から小さな隕石の様なものが地面めがけて落ちる。
「うわあああっ！」

「ひいいいいっ！」
周りにいる兵士たちは逃げていくが、巻き込まれてけものだまとなる。
「まずいな・・・シンク、ここから離れるぞ！」
「わ、わかった！」
さすがにあちらもまずいと判断したのか、飛ぶようにして離れていった。
「ソニック殿！」
「エクレか！大丈夫か？」
「はい、こちらは大丈夫ですが・・・」
「紋章術って、あそこまで出来るのか・・・さっきソニックが使った奴以外にも、こんな使い方があるんだ」
あちらが何か言っているが、ここで決めさせてもらうぞ！勇者、垂れ耳、そしてソニックよ！
「大・爆・破ぁ！」
そして、空気を震えさせるような音とともに、大爆発が起こった。
さすがにこれは、よけきれんだろう…
〜ば、爆破ぁっ！レオンミシェリ閣下必殺の、「獅子王・炎陣・大爆破」！範囲内にいる限り、立っていられるものはいないという「確かに、これは立ってはいられないねぇ」えええっ！？〜
ふと、上を見上げると・・・
「立っていられなければ、飛べばいいのさ！」
〜な、なんとぉ！勇者とエクレール親衛隊長、そしてソニックは空に飛んで避けていた！い、一体何をしたのでしょうか？〜
その映像が、映し出される。
見てみると、ソニックが二人を近づけ、そして懐から何かを取り出し…そして消えた。
そして、いつの間にか空にいた。何をしたのだ・・・？
だが、このまま下に落ちれば最高の的だ。これで決めてやるぞ！
「エクレ、俺を蹴って下に思いっきり落としてくれ！シンク、ちゃ

んとつかまってろよ！」
「わ、わかりました！」
「ＯＫ！」
勇者の首根っこをつかむと、ソニックは背を垂れ耳に向けて・・・
こちらに蹴りだされた。
「いやっほー！」
「ねえこれ速すぎない！？ねえ速すぎないっておわあああああああぁぁぁ・・・」
正直勇者を見るのがつらい。大丈夫なのじゃろうか・・・？
「シンク、行くぞ！」
「え？」
「棒を前に突き出して、そのまま突っ込め！」
今度は勇者が蹴り飛ばされた。ふ、不憫じゃのう・・・
「ええい、もうどうにでもなれー！」
と、もう覚悟を決めたのかそのまま突っ込んできた。ふっ、だがそれだけで・・・
「我を倒せるとでも、思うなよ！」
「くっ！」
激しくぶつかり合う、斧と棒。火花を散らし、つばぜり合いのように押し合う。
「いったん離れろ、シンク！」
その声で離れる勇者。ソニックは我の後ろ・・・挟み撃ちをする気か。
「「でええええりゃあああああっ！」」
剣と棒で両側から攻め込む二人。ここで負ければ、今回の戦は負け同然・・・絶対に止める！
「にぎぎぎぎ・・・」
「か、堅いな・・・」
よし、このまま耐えきる「悪いが、決めるのは俺たちじゃあない」
なっ・・・！？

「「頼むぞ（よ）、エクレ（エクレール）！！」」
「列空・・・十文字っ！！」
一気にその場を離れる二人。上からは垂れ耳が紋章術を発動・・・
初めからこれを狙っていたというわけか！
「・・・見事じゃ」
そのまま、妾は緑色の十字に飲み込まれた。

第二話：紋章と協力と決着（後書き）

次回予告
総隊長撃破ボーナス＋ソニックやらシンクやら、エクレールなどの活躍で、久しぶりに勝利を収めることができたビスコッティ。
「あのー、もしよければなのですが、このままこの国で戦ってもらえませんか？」
「またあのアスレチックみたいなコースで遊べるなら、大歓迎だぜ！」
ミルヒオーレからお願いされ、快くそれを受け入れるソニック。
ソニックは、またもお姫様と同じ時を過ごすこととなった。
次回、『お姫様とソニック』　フロニャルドを駆けろ、音速のハリネズミ――――
「次回は、ペースダウンだぜ？」

ペースダウン、というのは、簡潔に言うと日常を描く感じです。
戦闘ばっかり、というのは、作者の文章力上続きません。はっきり言って、無理です。
カオスエメラルドは、なるべく使わないようにします。「ここぞ」という時に、使う感じですね。

第三話：お姫様とソニック（前書き）

レオンミシェリとの決着も付き、今回の戦で勝利を収めることができたビスコッティ。ソニックは、ミルヒオーレから『お礼がしたい』ということで、お城に向かうことになった。

久しぶりに感想が来ました！（なのはの作品も含めて）
感想を下さったＳＨＡＤＯＷさん、ありがとうございます！更新スピードは、なるべく上げていきたいと思います。

第三話：お姫様とソニック

第三話：お姫様とソニック

〜そこまでー！〜

実況のフランボワーズが、戦争終了の合図をする。

〜今回の結果は・・・もう詳しく言うこともないでしょう。ビスコッティ共和国の勝利です！〜

『わあああああああぁぁぁぁぁっっっっっ！！！！！・・・・』

久しぶりの勝利ということで、ビスコッティの兵士たちは全員が喚起していた。

〜えー、今回のＭＶＰは、ビスコッティに召喚された勇者の「シンク・イズミ」、親衛隊長の「エクレール・マルティノッジ」ということに・・・なりますかね？バナード将軍〜

〜従来ならそれでいいのですが・・・そうですね、それでは私から特別に、ソニックさんにもＭＶＰを差し上げようと思います〜

〜おお！これはまさか、いや、当然の展開か？突如ビスコッティ側に参加し、音速で敵をなぎ倒したソニックさんも、ＭＶＰとなりました！〜

〜では、その三人の方にカメラをお願いします〜

ビオレの一言で、モニターに三人の姿が映し出される。

「ではまず、勇者のシンク・イズミさんから一言」

「え、えーっと・・・初めて参加して、怖かったり、ドキドキしたりしたけど・・・ものすごく楽しかったです！またあちら側の閣下に勝てるように、頑張っていきたいと思います！」

〜おおっと、これは結構な強気発言！これからが楽しみです！〜

「次に、エクレール親衛隊長、お願いします」

「は、はい。今回は敵の戦力も多く、苦戦を強いられる戦いが前半続きましたが、勇者とソニック殿の力で、このような結果をもたらすことができたと思っています。これからも、勝利を勝ち取れるよ

うに、精進していきたいと思います」
〜これは親衛隊長らしい発言ですね。頑張ってほしいものです〜
「次にソニックさん、どうぞ」
「あ、おれか・・・そうだな。気づいた時にはこっちの世界にいて、花火大会でもやってるかと思って来たらこんなんで・・・まあ結果的には楽しかったからよかった！また出るかもしれないから、応援よろしく！」
〜三人とも、お疲れ様でした！では・・・おや？レオンミシェリ閣下から、一言三人にあるようです〜
「あー、まさか初めて戦に参加した二人と、垂れ耳によって倒されるとは思っておらんかった。服もこのようになっておるしな」
先ほどの「列空・十文字」により、レオンミシェリは白旗を上げて敗北。総隊長撃破ボーナスが加算され、このような状況になっている。
技のせいか、上につけていた鎧はすべて吹き飛び、下に来ている薄い洋服と短パンという、普通の人が見たら赤い顔してそっぽを向きそうな格好である。
「先ほどの連携、見事じゃった！だが、次はこうはいかんぞ？」
そう言うと、「獅子王・炎陣・大爆破」で巻き添えを食らった自分の兵士（ねこだま）と一緒に帰って行った。

「帰れない―、僕はこのまま帰れない―・・・」
「お、おい…気を落とすなって。な？」
がっくりとうなだれ、地面に座り込んで「の」の字を地面に書いているシンク。
先ほど、エクレールに「召喚した勇者は帰れないぞ？」と言われたのがよっぽどのショックだったらしく、今のような状態になっている。
俺は・・・まだ望みはある。カオスコントロールで、ワープを繰り返せばいずれ元の世界にたどり着く可能性がある。だが、もし途中

で何かしらあったら・・・世界と世界の狭間の様な物で一生さまよい続けるかもしれない。
あいつ（・・・）なら、まだ何とかできたかもしれないけどな。
ロラン・マルティノッジ…だっけか？エクレの兄貴が、インタビューを受けて・・・シンクについて聞かれてる。
なにか言って・・・どうやらうまくいったようだ。シンクは出なくてすむ。
「兄上、さすがです。こんな状態の勇者は出せません・・・」
俺はシンクに向けて、合掌した。　頑張れ、明日があるさ。

「今日は、うちの妹を助けてくれてありがとう」
「いや、さすがに女の子に向かってあの人数は、さすがにやりすぎだと思ったからな」
現在、ビスコッティのお城の中。ソニックは、「先ほどの戦のお礼をしたい」とミルヒオーレから連絡があり、騎士団長である『ロラン・マルティノッジ』とともに城の中を進んでいた。
「それにしても、あのスピードはすごいね。一体何をしたんだい？」
「ちょっと道具は使ったりしているが…ほとんどは元からさ。走るのが好きだからな。剣術は口うるさい相棒から教えてもらったよ」
「それはまた・・・その「相棒」とやらに会ってみたいものだ。一度ご教授願いたい」
「あんたならすぐに教えてくれるさ。騎士道精神が身についてそうだ」
「はは、ありがとう。お、ここが姫様の部屋だ」
着いたのは、一つのドアの前。上に現地の言葉で『王女様の部屋』と書いてある。
ロランがノックをし、「姫様、ソニック殿を連れてまいりました」と言うと、「どうぞ―」と中から返事が来た。
「失礼します、姫様」
「失礼します・・・」

ソニックも、騎士道精神はたたきこまれた。たいてい自分の道を突っ走る男だが、やるときはやる。
「そんなにしなくて結構ですよ、ソニックさん。先ほど話していたように、普通に話して構いません」
「あ、そうなのか？いやー、こういう時の態度はできるんだが、やっぱり慣れないな」
打って変わって、いつものようにラフに話すソニック。ロランは隣で苦笑いを浮かべている。
「さっきはエクレを助けてくれて、そしてこのビスコッティを勝利に導いてくれて、本当にありがとうございます」
ぺこり、とミルヒオーレが頭を下げる。
「別にそんなに頭を下げなくてもいい。俺は俺として当然のことをやったまでだし、おまけにあそこまで楽しめる戦いなら、俺はいつだってやるけどな」
現に、ソニックは様々なコースを走ってきている。単純なものから、複雑なもの。
時に森の中、街の中、草原。はてには宇宙のコースまで走っているのだ。
そのソニックにおいては、先ほどのコースなど朝飯前だろう。
「そうですか…なら、一つ提案をしたいのですが」
「なんだ？」
「もしよければなんですが…このまま、この国で『兵士』として戦ってくれませんか？もちろん、それ相応の優遇はしますし、できる範囲で、あなたをサポートします」
「そうだな…このまま、ってのは無理だな。現に俺にも、住んでいた世界があるし」
それから、ソニックはここに飛んできた経緯を話した。
「それはまた・・帰ることができる道具はあっても、確実に戻れる保証はない、ということですよね？」
「ああ。俺よりもっとそれを使いこなせるやつがいるんだが、俺は

そいつほどじゃないからな」
ちなみに、先程から出ている「あいつ」とはソニックのライバルであり、時に仲間である『シャドウ・ザ・ヘッジホッグ』のことである。
カオスコントロールは、もとは彼が使っていたものであり、エッグマンの罠で宇宙空間に排出されたときに、『マイルス・パウワー』（通称『テイルス』）から受け取っていたレプリカのカオスエメラルドを使い、カオスコントロールを発動できたのだ。
「ま、俺も冒険家だし。そんな急いで旅はしない方だ。ついでと言っちゃなんだが、あの面白い戦いができるってのなら、喜んでやってやるぜ」
「本当ですか！？ありがとうございますっ！」
さっきよりも深く頭を下げた。尻尾は喜びを表しているのか、大きく振れている。
「そういや、前もこんなことがあったな」
「前、とは？」
「いや・・・そのエッグマン、ってやつがお姫様を攫っちまってな。それを救って、少しの間同じ時を過ごした時があってな」
「ソニックさんは、本当にいろいろなことをしているんですね」
「ま、旅人だしな。あー、ちょっと一つ聞いてもいいか？」
「なんでしょう？」
「『カリバーン』って剣、聞いたことないか？」
「カリバーン・・・ロラン、聞いたことはありますか？」
「私はないですね。知っているとすれば・・・ああ、ダルキアン卿か、ユキカゼなら知っていると思います」
「ダルキアン卿と、ユキカゼって？」
「このビスコッティを拠点に、いろいろなところで旅をしている二人組のことですよ」
「ああ。それなら何か知っているかもな」
少し希望が持てたソニック。もしあるとすれば、彼の大幅な戦力ア

ップが見込めることだろう。
「姫様、今日はこの後コンサートがあると思いますので・・・ここで」
「そうですね。ソニックさん、また時間があれば、もっと話を聞かせてくれませんか？」
「いいぜ。好きなだけ聞かせてやるよ」
そう言って、ソニックとロランは部屋を後にした。

「そういや、コンサートって？」
「姫様は、戦に勝つと戦ったものをねぎらうということで、コンサートを行うんだ。言っておくが、フロニャルドでも有名な歌手なんだぞ？」
「それは期待できるな。早く聞きたいもんだぜ」
だが、その前に大変な事態が起きてしまうことを、俺はまだ知らなかったのである。

第三話：お姫様とソニック（後書き）

次回予告

「ってわかるかーい！」

「私に聞くな！」

ソニックがミルヒオーレと話しているころ、シンクはエクレールと街を散歩していた。

詳しい国の取り決めなど、いろいろなことを聞く。

「やった、つながった！」

とりあえず、リコッタの力を借りて元の世界と連絡を取ることに成功。少し安心するシンク。

だが、コンサート前に大変な出来事が起こってしまう。

一体どうなるのか！？

次回、『散歩と連絡と諜報部隊』　フロニャルドを駆けろ、音速のハリネズミ――――

「次回は、僕が主役！みてねー！」

次回はほとんど原作とおんなじはなし。セリフをまとめるのが大変だ・・・

週に一回は上げていきますので、次を楽しみにしている方は、すみませんがお待ちください。余裕があれば、週に2，3回は上げていきたいです。

第四話：散歩と連絡と諜報部隊（前書き）

今回はシンクが主体のお話。ソニックも出てきますが、そこまで何がある、ということでもないです。
午前中に更新したかったのですが、インターネットの不調でこんな時間に。すみません。
では、どうぞ。

第四話：散歩と連絡と諜報部隊

第４話：散歩と連絡と諜報部隊
「はあ・・・」
「いつまでそうしているつもりだ。もうちょっとしゃきっとしろ」
「そう言われても・・・」
とぼとぼと歩く僕と、それを気にしない、と言った調子で歩くエクレール。
帰れないとわかってしまった以上、気にしないわけにはいかないわけで。
「貴様が帰る方法は、今研究院のみんなが探してくれている。まだ希望は完全になくなったわけじゃないんだ」
「そうなんだ・・・少し元気でたかも」
とはいったものの・・・
「異世界だもんなぁ・・・携帯がつながるはずもないわけで」
「全く…覚悟もないのに召喚に応じるからだ」
あきれた様子でエクレールが言う。
「覚悟も何も、このわんこが！」
あの時のことを思い出しながら、叫ぶように言う。
「踊り場から降りようとしたら、落とし穴を仕掛けて！」
「落とし穴？タツマキが」
その声を聞いたのか、わんこがきちんと座ると、目の前に小さな魔法陣みたいなのを出した。
「なになに・・・『ようこそフロニャルドへ。おいでませビスコッティ。注意：これは勇者召喚です。召喚されると帰れません』」
「え！？」
こくり、とうなずくように首を振るわんこ、いやタツマキ。
「『拒否する場合はこの紋章を踏まないでください』」
びし、と体中にひびが入った気がした。

「そんなんわかるかーい！」
「知るか！私に言うな！」
我関せず、という感じで別の方を向くエクレール。ねえ、僕勇者だよね・・・？
「まあさっきも言った通り、変える方法は研究院のみんなが探している。じきに判明するさ」
「そう・・・だけど」
「まあ、一応お前は客だ。ここでの暮らしに不自由はさせん」
と、一つ小さなきんちゃく袋を渡してきた。これって・・・おかね？
「そんな、悪いよ」
「ありがたく受け取っておけ。受け取らないと財務の担当者が青ざめる」
「う、うん」
その後は、この戦争のルールや周りの魔物のこと、フロニャ力の加護のことを聞きながら、食べ歩きをしてお城に向かった。

「ほんとーに、申し訳ないのであります！このリコッタ・エルマール、勇者様が帰還できる方法を探していたのでありますが・・・」
ぺこぺこと、一人の少女がシンクに向かって頭を下げる。
この少女は「リコッタ・エルマール」と言い、ミルヒオーレとエクレールの親友である。
13歳という若さだが、ビスコッティ国立研究院の主席研究員でもある。
「力及ばず、どーにも、こーにも・・・」
「いや、リコ落ち着け。私も勇者もそんなにすぐ見つかるとは思っていない」
「え？」
軽く絶望したような表情のシンク。
「ですが・・・」
「そ、そうだよ・・・うん」

「本当でありますか？」
ほんの少し、表情が戻ったリコッタ。
「期限について何か言っていたが、いつまでなんだ？」
「えっと・・・春休み終了の三日前、の前日には家にいないといけないから・・・あと１６日」
「１６日！それなら希望がわいてきたであります！」
「うん、お願いします」
シンクにも笑顔が戻る。と、何かを思い出したような表情でこういった。
「でも、その前に・・・」
「？」
と、取り出したのは先程電波が圏外になっていた携帯電話。まあ今もなのだが。
「召喚された穴のところに行ったら、電波通ったりしないかな？」
「電波？」

「ぬおおおおおおおお・・・」
シンクは、思いっきり紋章に腕を突っ込んでいた。すっごい表情だ・・・
「やっぱり通れない！」
「だから言っているだろうが」
「人生何でもチャレンジ！ｎｅｖｅｒ　ｇｉｖｅ　ｕｐ！」
「その精神は、俺も嫌いじゃないぜ？」
城を出ようとしたら、携帯電話の電波が（省略）ということで山に向かう、との事だったので、俺もついていくことになった。
着いたのは俺が最初にやってきた石段のところ。ここが召喚の場所だったのか。
「勇者様―！準備、整ったのでありまーす！」
と、リコッタが持ってきたのは巨大なアンテナにでっかい機械がついたもの。

「えーっと、それは？」
「放送で使う、フロニャ周波を強化・増幅する機械であります。自分が5歳の時に発明した品でありますが、今じゃ大陸中で使われているのでありますよ」
ひゅー、と、俺は口笛を吹いた。5歳であんなものを作り上げるとはな・・・テイルスといい勝負かもしれない。二人を会わせたらとんでもないものを作り出すかもな。
と、何やら電源を入れ、それにシンクが近づいた。さーて、どうなるかな？
「うおーっ、たった！アンテナ立ったよ！」
「おー、やってみるもんだねぇ」
「リコッタすごいよ！ありがとう！」
「感劇でありますっ」
と、敬礼をするリコッタ。で、電話をかけるシンク。案外俺が持ってるのもつながったりするかな・・・？
と思い、懐から電話を出してテイルスにつないでみる。いけるかな？

その頃一方、ソニックがいた世界のどこか。
テイルスは、自分の飛行機である『ハリケーン』を整備中だった。
「出力調整はこのくらいで・・・うーん、これだとレーザーが弱いかなぁ・・・？」
と、お悩み中。そこに、一本の電話が。
「はいもしもし、テイルスです」
『おー、テイルス。久しぶりだな！』
「ソニック！久しぶりだね。今どこにいるの？」
『旅の途中でブラブラしてるさ。そっちはどうだ？』
シンクと同じように、ソニックの電話もつながっていた。
「こっちはハリケーンの調整中。うまくいかなくてね」
『そうか、頑張ってくれ。また暇になったらそっちに行くぜ』
「うん。待ってるよ」

リコッタの機械は、汎用性がすごいということが分かった瞬間である。

「ソニック殿！」
「おー、ロランさん。どうしたんだ？」
用事も済んだので、ぶらぶらと城の周りを歩いていたんだが・・・
どうしたんだろうか？
「いや、街の鍛冶屋に頼んで君の剣を作ってもらったんだ。話にあった『カリバーン』があるかどうかは分からないからね。それまでのつなぎ、の様なものさ」
「助かるぜ！ありがとな」
渡されたのは、鞘に入った一振りの剣。月明かりを反射して、輝いていた。ちゃんと俺の体格にも会わせてあるし・・・最高だな。
「そして、姫様からはこれを」
「これは・・・ガントレットか？」
そのガントレットは、エクレが付けていたものを俺用に小さくし、紺色に染め上げたもの。
動きを阻害しないような作りになっていた。
「『剣を使うのであれば、ぜひ使ってみてください』とのことだ。どうだい？」
「ばっちりだ。ありがたく使わせてもらうことにするぜ」
かちゃかちゃと音を立てながら、それをつけていく。おー、まるで体に合わせたかのようにしっくりくる。この国の鍛冶屋はいい仕事をするなぁ。
「明日の朝にでも実践形式でやりたいな。兵士の練習って、いつからだ？」
「大体・・・9時ごろからは始めているね。朝ごはんを食べた後だから」
「りょーかい。覚えていたら行くよ」
と、俺用の部屋に向かおうと思ったそのとき・・・

「きゃーっ！！」
「「！？」」
空気を切り裂くような悲鳴が、城の中から響いてきた。
「おい、今のって！」
「姫様の声だ！くっ、ここから最短の入口までは最低でも5分は「俺が行く」え？」
ソニックはトントンとつま先で地面をたたくと、前傾姿勢になる。
「俺のスピードなら、1分もかからねぇ。ロランさんは周りから脱出されないような対処を」
「わ、わかった。姫様のこと、頼んだぞ！」
「わかった！」
その瞬間、目にもとまらぬ速さで、一筋の青い閃光が夜空を駆け抜けた――――

「姫様っ！」
くっ、お風呂に入ってゆっくりしようかと思ったらこんなことに！
何者かは分からないけど、人数は三人・・・一体どこのどいつだ！？
「我ら、ガレット獅子団領！」
「ガウ様直属、秘密諜報部隊！」
『ジェノワーズ！！！』
と、どこかの戦隊ヒーローかという感じに、後ろで三色の爆発が。
「ビスコッティの勇者殿。あなたの大事な姫様は、我々がさらわせていただきます」
「うちらは、ミオン砦でまっとる「待つ暇なんかないね」っ！？」
「とっとと始めようぜ。まどろっこしいことなしに、ここで決着をつける」
チャキ、と剣をさやから出し、それで三人を狙うように上にあげるその姿。
「そ、ソニック！」
「悪い、遅くなっちまったな」

「こっちもごめん。まさか、こんなことになるなんて・・・」
「後悔したって仕方ねえ。今は姫様を助けることだけ考えるぞ」
上にいる三人は、いきなりの登場にあたふたしている。
「思わぬ邪魔が入ったわね・・・ここは一旦！」
『逃げる！』
と、煙幕の様なものを出して逃げた。煙がはれた後には・・・その姿は消え、姫様の姿もなかった。
「くそっ！コンサートまでは時間がないってのに！」
「ソニック殿！」
走ってきたのはエクレール。どうやらさっきのことは、映像か何かで外の方にも伝わっていたようだった。
「このどあほ！なぜ助けなかった！」
「ごめん・・・」
「落ち着けエクレ。今は怒ってる場合じゃない。コンサートまでの時間はあとどれくらいだ？」
「おそらく・・・残り一刻半。急いで助けにいかないと・・・」
「最悪の結果、ってわけか」
「させるかよ・・・」
「「え？」」
「そんな結果、導いてたまるかっ！絶対に姫様を助けて、コンサートも行わせて見せる！」
そうだ、僕は姫様に呼ばれてここまで来たんだ。その人を守る責任は、僕にだってある。
「いい顔だ、シンク。よし、おそらく今から準備をしていたらまにあわねぇ。今動かせる人はどれくらいだ？」
「私と勇者、ソニック殿に、外にはリコッタとセルクル３匹を待たせてあります」
「俺には乗り物はいらないから・・・他の三人で乗ってもらえばいい。先陣は俺が切ろう」
「わかりました」

こうして、姫様奪還戦の火ぶたが切って落とされた。

第四話：散歩と連絡と諜報部隊（後書き）

次回予告

「おいおい、冗談だろ？」

「か、かっこいいでありますっ！」

ミルヒオーレが囚われているミオン砦。ソニックがたどり着くと、そこにはなんと一つのロボットが。

〜ふっふっふっ〜、このロボットの性能を、とくと味わうといいわ！〜

「へっ、上等だぜ！」

次回、『決戦、ミオン砦〜ｓｉｄｅ　ソニック』。フロニャルドを駆けろ、音速のハリネズミ――――

「次回も、全速力で突っ切るぜ！」

次回は、ソニックシリーズに出てきた一つのロボットが出ます。そして新キャラも。お楽しみに。

第五話：決戦、ミオン砦～ｓｉｄｅ　ソニック（前書き）

新キャラ参戦です。お楽しみに。

ＢＧＭ：ｖｓ　ビッグフット・フライングドッグ戦

第五話：決戦、ミオン砦～ｓｉｄｅ　ソニック

第５話：決戦、ミオン砦～ｓｉｄｅ　ソニック

夜。月明かりが少し地面を照らしているころ。

たたたたた・・・という音とともに、何かが走っている音が二つ響く。

一つはセルクル。シンク、エクレール、リコッタが乗っているセルクルが、出せるスピードの最大速度で地面を駆けている。

で、もう一つ走っているのは・・・ソニックである。

「おいおい、もうちょっと速く走れないのか？そのセルクルってのは」

「無茶言わないでください！これ以上速度を上げたら倒れますよ！？」

「す、少し酔ってきたであります…ぐふ」

「ひゃっほー！これくらいだとジェットコースターみたいだ！」

一人楽しんでいるシンク。何とかしがみついているリコッタ。慣れたように乗っているエクレール。

それに合わせるように走るソニック。これでも彼はスピードを大分落としている。全速力で走れば、彼の姿など２，３秒ほどで視界から消えてしまうだろう。

「思ったんだけど、ソニックが一気に敵陣に切り込んで、その後を僕達が行った方が効率的にもいいんじゃない？」

「まあ、敵がいない方が楽に進めるな」

「自分は後方支援型でありますから、ここら辺で別れても大丈夫でありますし」

「そうか…なら、先に行かせてもらうぜ。なるべく早く来いよ？」

『了解！（であります！）』

その言葉を聞くと、ソニックは一気にスピードを上げ・・・大量の砂埃とともに姿を消した。

「アキュリス殿、例の『ハリネズミ』、こちらに近づいているようです」
「そう、ちょうどいいわ。勇者が出たっていうから、そっちで試してみたかったけど、別に性能のチェックができればそれでいいからね」
ミオン砦・・・の横。そこには、赤ワイン色の髪に猫の耳を生やし、白いワイシャツの上に薄茶色のジャケットを羽織った一人の少女がいた。
その隣には、夜のせいでほとんど見えないが、月明かりによってシルエットだけが見えている、何やら巨大なもの。
「ふっふっふっ、この『クリスティーナ・アーバイン』の技術力を、とくと味わうといいわ！」
ういぃぃん、と何かが起動する音とともに、その声は夜の闇に溶けた。

「見えた！あれだな」
結構かかると思ったんだが、案外近かったな。砦だし、結構大きな建物だ。
その前には見積もって・・・５０人くらいか。兵士が待機している。
（躊躇なんてしていられねぇ…一気にケリをつける！）
背中に背負っている剣をさやから引き抜き、切り進もうとした…その時！
｛待ちなさい！このハリネズミ！｝
「！？」
突然、どこからか大きな声が聞こえた。どこからだ？
｛兵士のみなさんは下がっていてください。巻き込む危険性があるので｝
その声で、前の兵士は離れていく。巻き込む危険性・・・この前の猫耳のお姫様が使った紋章術みたいのを使うやつが、まだいるって

ことか！恐ろしいねぇ。
と、思っていたのだが、現れたのは・・・
「ビッグ・フット・・・だと！？」
それは、俺にとって思い出したくない経験の一つである。
シャドウとまだ敵対関係だったころ、俺は姿が似ているということで軍から追われていた。
街から逃げて、やっと出れる・・・と思った時に出てきたのが、こいつだ。
名前通りの巨大な足。肩のあたりに二つあるミサイルポッド。飛行用のブースター。
あの時ははこの上に登ってから攻撃する必要があったが、バウンドブレスレットがある今の俺ならば、大丈夫なはず。
「初めまして、ハリネズミさん・・・いや、ソニックさん」
と、コクピットから一人出てきた。操縦者か？
「あんたは、誰だ？見た目からするに、ガレットの奴ってことはわかるが」
「私の名前は、クリスティーナ・アーバイン。ガレット獅子団領一の技術者よ。ま、５歳でこの大陸中で使われている機械を生み出した子には、少し劣るかもしれないけど」
（いや、リコッタよりすごいぞ）
見た目はおそらく１５歳くらいだろう。リコッタと年が離れているとはいえ、その年であそこまでロボットを作り上げるのはすごい。
（ま、テイルスには負けるだろうけどな。本当に連れてきたくなってきた）
「とにかく、私はこのロボットの試験運転の相手として、君を実験台代わりにさせてもらうわ」
「断る。こっちは急いでるんでね」
「仕方ないなぁ…なら」
ういぃぃぃん、と駆動音が響くと、少女はコクピットに入り、そして・・・

《無理やりにでも、実験台になってもらおうかしら！》
ミサイルポッドが開き、こっちに向かって８つ一気に打ち出してきやがった！
「ずいぶんとあらあらしい女の子だな、畜生！」
ステップを踏むようにして躱す。スピードが少し早くなったこと以外は、変わっている点は見かけられない。なら――
（バウンドアタックを連続で当てて、一気に決着をつけさせてもらう！）
と、丸まって何度か弾みをつけ、ある程度の高さまで来た瞬間に・・・
「くらえ！」
とび蹴りの要領で、コクピットを攻撃。狙いはバッチリ、これなら――と思っていたのだが、
《残念でした？》
突如目の前に紋章が現れ、はじかれる。そうだった。中に乗っているのは普通の人じゃない。この世界の人ならば、そう言ったことができるのも当然だ。
《コクピットが弱点、というのはわかりきっているからね。こうやって対処させてもらったわ》
「・・・だったら！」
あっちがあっちなら、こっちだって！
最初の戦いと同じように、エネルギーをため、ソウルサージを決行する。
これなら、スピードに対処はできないはずだ――！
「でりゃあああああっ！」
ロケットのように飛び出した。だが。
《それも想定済み》
今度はロボットから何かしらの光の壁が現れ、止められる。ちいっ！
《徹底的に防御力は高めてあるわ。まあ、それのせいでちゃんとした攻撃方法がミサイルだけなんだけど》

くっ、どうすればいい？カオスエメラルドを使って飛べばどうにかなるかもしれないが、攻撃の度にそれじゃ危険が高い。
夜・・・ちっ、あの狼みたいな姿になれれば楽なんだが、無理だ。
と、思っていた時、どこからか桃色の玉がこっちに飛んできた。花火か？
だが、それは全く違うもの。
爆音とともにそれは爆発し、下がっていた兵士をふっ飛ばし、ロボットにも少し当たった。
〜おっとっと〜
「これって――――まさか！」

「何とか当たったでありますね。それにしても大きな機械であります・・・」
後方支援役（砲撃士）、リコッタ・エルマールが、砦に向かって砲撃を飛ばしていた。
彼女の紋章の色は桃色。さっきの砲撃も彼女のものだ。
「少しでも力になれるよう、頑張るのでありますっ！」
一つ指パッチンをすると、周りの砲台に一斉に準備が行われる。
（できることなら、一遍あの機械を分解してみたいでありますなぁ・・・）
かすかな野望とともに、若き砲撃士は戦闘に参加していた。

シンク　ｓｉｄｅ
「ソニック！」
「ソニック殿！」
セルクルができる限りのスピードで飛ばして、砦までたどり着いた。
もうそこら中の兵士はおさらばしていることだろう・・・と思っていたんだけど。
「「なっ！？」」
兵士は確かにいない。いないのだが・・・いたのは、ソニックとそ

の前に立っているでっかいロボットだった。
〜あら、勇者さんまで来ちゃった。ついでにエクレールも〜
「クリスさん！？なんであなたがここに！」
〜ちょっとした稼働実験。相手はソニックさん〜
「無理やりやらされているがな・・・倒そうにもめちゃくちゃ強い」
ソニックが苦戦するほどの相手・・・なら！
「僕も戦う。紋章砲なら、ある程度のダメージは見込めるはずだから」
「なら、わたしも！」
「駄目だ！お前らは先に行って、お姫様を助けて来い！コンサートが中止になっちまったら、楽しみにしている人たちが悲しんじまう！」
「だけど！」
「いいから行け！リコッタの砲撃だってあるんだ。そう簡単にはやられねえよ」
「・・・わかりました」
「エクレール！？」
「今は姫様を助けることが最優先なんだ。助けてしまえば、あとは逃げればいい」
「っ〜〜〜！」
悔しいが、今はエクレールの言うとおりだ。
「わかった。こっちも早く片づけるから！」
「頼んだぜ！」
待ってて、すぐに戻るから———
シンクｓｉｄｅ　ｅｎｄ
「っ、はっはっはっ！」
と、遠くから笑い声が響く。声の主は、望遠鏡を通して戦場を見ていた。

「これはすごい。暗がりゆえ、誰が誰だかはわからんが・・・若い騎士たちが頑張っているようでござる」
この騎士の名は、「ブリオッシュ・ダルキアン」。ビスコッティの騎士であり、最近はそこら中を旅している。髪のベースは茶色で、先端は焦げ茶色。威厳を感じさせるオーラが見えている。
「ですが、親方様・・・」
と、付き人の一人が心配そうな顔でそばにやってくる。
「ビスコッティとガレットの戦の様ですから、我々も加勢をするべきなのでは・・・」
付き人、もといダルキアンの相棒、と言った方がいいだろう。名前を「ユキカゼ・パネトーネ」。流れる金髪に、狐の耳が生えているのが特徴だ。
「若者同士、楽しく戦をしているのでござろう。大人が邪魔をするのも無粋でござるよ」
とくとく、とお酒を器に注ぐダルキアン。
「拙者はのんびり、見物をさせてもらうでござる」

ソニックｖｓ　クリスティーナ。戦いは続く・・・

第五話：決戦、ミオン砦～ｓｉｄｅ　ソニック（後書き）

次回予告
強固なバリアを持つビック・フット。それをコントロールするクリスティーナの障壁の防御力によって、少しずつソニックの体力は削られていった。
「せめて、リングがあればっ・・・」
〜いい加減、あきらめたら？〜
一か八かの賭け、それをソニックは決行する。果たしてその結果は
―――
「ぶち、抜けえぇぇぇっ！」
次回、「騎士として、自分としての意地」。フロニャルドを駆けろ、音速のハリネズミ―――
「次回も、全速力で突っ切るぜ！」

親方様＆ユキカゼも登場。私はユキカゼが好きです。
ビッグフットは、「ソニックアドベンチャー２（バトル）」の最初のボスです。箱の上に登り、そこからホーミングアタックを使って倒します。
バウンドブレスレットをとってからは、お話にもある通りバウンドで飛んでから攻撃できるので、あっという間に倒せます。
まあ、さすがにそれじゃソニックが強すぎる、ということでこんな感じに。基本スペックは変わりませんが、防御力を高めにしました。
果たして、どうなることやら・・・

第六話：騎士として、自分としての意地（前書き）

ＶＳクリスティーナ＆ビッグ・フット戦です。
ソニックアドベンチャー２では楽勝な相手でしたが、改造されたこいつは一味違いますよ？
では、どうぞ。
ＯＰ：Ｋｎｉｇｈｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｗｉｎｄ

第六話：騎士として、自分としての意地

第六話：騎士として、自分としての意地
「ふー・・・」
一旦呼吸を落ち着ける。あちら側の攻撃方法は、ミサイル。まあその大きな体を生かして体当たりをするのも可能だろうが、しないだろう。
ブースターがあるはずだが、使っていないのはなぜだろうか？
「（もうあれはビッグ・フットであってそうじゃない。名づけるなら『ビッグ・フット改』と言った感じだろうな）」
紋章術でのシールド、ロボットからの障壁。とりあえずコクピットに攻撃が伝わらないならば・・・
「（相手の攻撃の目からつぶす！）」
狙いは、両肩にあるミサイルポッド。根元から切り落として、損傷がなければ中のミサイルだって使えるかもしれない。
「いくぞっ！」
〜あら、攻撃が伝わらないのによくやるわね〜
相手は作戦に気づいていない。やるなら今だ！
「紋章展開・・・最大速度だ！」
バン！と音速を破る音が響くと、俺は一瞬で右のミサイルポッド直前まで飛ぶ。
「まずは、こっちから！」
根元に剣を滑り込ませ、そのまま振り切る。普通ならば切れないだろうが、俺のスピードによって一気に切れた。
〜なっ！〜
落ちるミサイルポッド。どうやらきれいに落ちたらしく、切られたところから煙を上げるだけであとは何にも無し。
「よし、次は左だ！」
〜こんのぉ！〜

一気に体を回転させ、その巨体で体当たりを仕掛けてくる。
「あたるかよ！」
一気にその場から飛びのき、相手と距離をとる。
「（リコッタからの砲撃が止まってる・・・おそらく敵に見つかったか何かだな）」
少し前から支援砲撃は止まっていた。遠距離攻撃しかできないのであれば、近くに踏み込まれればその時点でアウト。普通はそうだ。

ちなみに、そのリコッタは。
「降参でありまーす・・・」
と、ガレットの兵士数人に向けて白旗を振っていた。

このビッグ・フットも、従来は近距離戦なら楽勝な相手。厄介なところと言えば飛ぶことくらいだった。だが、それの対処があの防壁とはな・・・
「（反射できないスピードはロボット、できるのは自分で対処。あの反応速度がどれほどかは分からないが、コクピットとロボットの障壁には若干だが隙間がある・・・）」
先ほど突撃したときにわかったのだが、直接的に障壁がコクピットに張られているわけではなく、大体小さい子供が入れるくらいの隙間がある。つまり攻略法としては、
どうにかしてその隙間に入り、操縦士の障壁を破る、もしくはその障壁を出している装置を壊し、前者と同じように障壁を破るという感じだろう。
「どうしたもんか・・・」
〜なに考えているのかしら？〜
「っ」
俺めがけてミサイルが飛んでくる。はしって避けて、また距離をとる。
ふと、俺の右手を見て・・・あることを思い出した。

「（もしかしたら、いけるかも・・・）」
それを実行するために、すぐに走り出す。向かったのは・・・さっきおとした右側のミサイルポッド。
「『マジックグローブ』、発動！」
キィン、と何かが起動した音が響くと、ミサイルポッドが光に包まれて・・・俺の手のひらに収まるくらいのサイズに丸まった。
〜なっ・・・あなた、何をしたの！？〜
「これは『マジックグローブ』って言ってな、本来なら近くにいる敵さんを丸めて敵に投げつけるもんなんだが・・・案外うまくいったな」
つまり、この手の中にあるのは、ミサイルが最低でも４発入った爆弾ってわけだ。
「（一か八か、これにかけるしかねえ！）」
バウンドジャンプで高さを上げ、コクピットの高さまで上がる。そして、そこめがけて・・・
「ぶっ飛べぇぇぇっ！」
ハンドボールでゴールにボールを投げ入れるがごとく、腕を振って爆弾と化したミサイルポッドを投げつける。
〜こんなもの！〜
ロボットの障壁を展開し、それを防ぐ。だが、それこそが俺の狙いだ。
ミサイルが最低でも４つは言っている爆弾。威力は・・・言わなくてもわかるだろう。
〜っ、そ、そんな！〜
ビシリ、とひびが入る音が響く。完全に破壊で来てはいないが、ここまでで生きれば上出来。
つまり俺の狙いは、これを利用してロボット側の障壁を破壊、もしくはそれ寸前まで持ち込むことだった。
操縦者の近くであんなものを受け止めたら、双方に被害が及ぶのは確実。ほとんどの確率でロボット側の障壁を使うと読んだわけだ。

その予想がピタリと的中し、このような結果になったわけだ。
「このまま決めてやる！」
〜させ・・・るかぁっ！〜
一気にミサイルポッドのミサイルを飛ばしてくる。それを蹴るようにして相手に近づいていく。（爆発する寸前に離れているから平気だ）
剣を正面に構え、そのまま突っ込む。
「まずは・・・こっち側だっ！」
ガラスが割れる音がしたかと思うと、ロボット側の障壁は完全に破壊され、コクピットに接近する。
〜まだよっ！〜
操縦士側の障壁に、剣が当たる。がりがりと削る音がして、そのままの状態が1分ほど続く。
「にぎぎぎぎ・・・」
〜いい加減…あきらめなさいよっ！〜
このままじゃ体力が切れちまう・・・せめて、背中にブースターか何かで押してくれるもんでもあれば・・・っ！！
ふと、この前の戦闘を思い出した。あの猫耳のお姫様は、とてつもない爆発を引き起こして敵を攻撃していた。なら、もしかしたら・・・
「（いけるかもしんねぇ・・・）」
キィン、と紋章を後ろに展開し、さらにフレイムリングを起動させ、炎を流すようにイメージしてみる。
〜何をしているのかしら？紋章を後ろに展開だなんて〜
「あんたにゃ関係ない」
よし、案の定後ろに炎が回ってきている。後は、紋章の力で剣の方向に押し込むだけだ。
「言っておいてやるよ・・・」
〜なにかしら？〜
「男ってのは、絶対に負けたくない生き物なんだよ！」

バン！と何かがはじける音とともに、後ろで爆発が起こり・・俺の剣の先端が障壁を貫いた。
〜そ、そんなっ・・・！〜
「このまま・・・ぶちぬけぇぇぇぇッ！」
そして、俺の剣は障壁を貫き・・・コクピットを破壊して、ロボットの後ろに着地した。
「ＧＡＭＥ　ＳＥＴ・・・だな」
そして、そのロボットはゆっくりと崩れ落ち…そんでもって爆発した。
「にゃーっ！」
その時、何か一つ玉の様なものがどこかにすっ飛んで行った。おそらく操縦士だろうな・・・
無事であることを祈ろう。

「ほえー、あのようなからくりを単身で倒すとは・・・すごい人もいたものでござる。いや、人には見えないような・・・？」
遠くから、ビック・フット改が倒れていく姿を見ている人が一人。ビスコッティ騎士団、隠密部隊筆頭、ユキカゼ・パネトーネである。
「大分疲れているようだし、回復に行った方がよいでござるな」
「ユッキー！花火も砲弾も、大量にゲットしたでありまーす！」
と、走ってきたのはリコッタ。敵に囲まれていたところを、ユキカゼが助け、現在に至る。
「ソニック殿も頑張っているでありますから、私達もがんばらねば！」
「ソニック・・・あの人はそのような名前でござるか」
「そうであります。ちなみに人ではなく、ハリネズミなようで」
「それはまた・・・あったら話してみたいでござる」
ミオン砦での決戦は、最終局面へ。

第六話：騎士として、自分としての意地（後書き）

次回予告
「これって・・・」
「久しぶりでござるな、エクレール」
隠密部隊の参戦で、激しさを増すミオン砦の攻防戦。
「これに勝たないと、姫様のコンサートが台無しになるんだっ！」
「こ、コンサートぉ？」
シンクｖｓレオンミシェリの弟であるガウル。結果は果たして・・・？
次回、「決戦、ミオン砦～ｓｉｄｅ　シンクｅｔｃ」。フロニャルドを駆けろ、音速のハリネズミ――――
「次回は、僕達が主役」
「楽しみに待っているでござるよ♪」

いかがだったでしょうか？決着が急ぎ足になってしまいましたね・・・
・
ＯＰの曲は、「ソニックと暗黒の騎士」のメインテーマです。
題名に「騎士」が入っているので、この曲を選びました。
実際にプレイはしたことはないのですが、プレイ動画は見て内容は知っています。出だしがなかなかに面白いです。
次回はミオン砦戦の決着です。果たしてコンサートの行方は？
ＥＤ：ＰＲＥＳＥＮＴＥＲ

第七話：決戦、ミオン砦～ｓｉｄｅ　シンクｅｔｃ　（前書き）

久しぶりの投稿です。待っていた読者様、すみません。
この話は一気に終わらせるつもりだったのですが、自分の中で２部構成にした方が書きやすくなってしまったので分けました。
では、どうぞ。

第七話：決戦、ミオン砦～ｓｉｄｅ　シンクｅｔｃ

第七話：決戦、ミオン砦～ｓｉｄｅ　シンクｅｔｃ

シンクｓｉｄｅ

「あー・・・敵が多い・・・・っ！」

「言うな勇者…考えるだけでも嫌なんだ・・・」

現在、ミオン砦内部。敵の数は聞いていなかったので、どのくらいいるかは分からなかった。内部ならそこまで人はいない・・・と踏んでいたのだが、おそらく見ているだけでも２００人くらい入るだろうか。ちょこちょこ倒して言ってもありの軍勢の様にわいて出てくる。（言っては失礼だけど）

「エクレール、ここはどちらかがわかれて、姫様を救いに行った方がいいと思う」

「同感だ・・・一旦紋章術か何かで薙ぎ払った後、どちらが出る」

「なら僕が行くよ。人込みを駆け抜けるのは得意だから」

「了解した…」

エクレールが剣を構える。あの威力なら、５０人くらいなら楽に終わるだろう。

そして、その紋章を放つ。その瞬間に、僕は駆けだそうとした――

――その時だった。

「どこに行く気だぁ？」

「っ！？」

突如、目の前に鉄球が落ちてきた。振り返ると、そこにはがっしりとした体格の人が一人。

エクレールも驚きの表情を浮かべていた。

「ッ、こんなところで止まってちゃいけないのに！姫様のコンサートがっ！」

「どうしてもお姫様を助けたいというのなら・・・」

びしっ、と、その大柄な人はある通路を指さした。
「あの道を通って、途中にいるガウル殿下と戦ってくることだ。それなら返してくれるだろう」
「あ、ありがとうございます」
とにかく僕は、教えられた通路に向かって走って行った。兵士の方々も道を開けてくれた。
まあ、これでいいのかな？

シンクｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ソニックｓｉｄｅ
「よし、これでだいぶ回復したでござるよ。体を動かすときに少し痛みが来るくらいだと思うでござる。ちゃんとした回復は、戦が終わった後でやるでござる」
「サンキュー。助かったぜ」
紋章術をかけてもらい、先ほど減少した体力を回復してもらった。とはいえど、最後のブーストスラッシュ（今命名）が体全体に衝撃を与えたらしく、倒した後そのせいか体全体を動かすのが飛んでもなくきつかった。
「ユッキーの紋章術は、結構いいものが多いのでありますよ」
「ユッキー？」
「ああ、自己紹介がまだだったでござるね。私の名前は『ユキカゼ・パネトーネ』。
ビスコッティ隠密部隊の筆頭を務めているでござるよ」
「俺はソニック・ザ・ヘッジホッグ。冒険好きなハリネズミさ」
軽く自己紹介をすませて、これからどうするかを話す。
「私達はこれから、砦の中で戦っている二人を助けにいくでござる。おそらく先に親方様が回っているはずだから、結構楽にはなるでござるね」
「親方様？」

「『ブリオッシュ・ダルキアン』、ビスコッティ一の騎士で、隠密部隊の頭領を務めているのであります」
ん？この二人の名前をどこかで聞いた気がするんだが・・・あ。
「名前だけは聞いたことがあったぞ、あんたたちのこと。いろいろなところで旅をしてるんだって？ロランさんと姫様から聞いたぜ」
「お―、ロラン殿が。久しぶりに会ってみたいでござるなぁ」
「二人とも、今はとにかく姫様を助けないと。コンサートが始まるまで、残り４５分…迅速な行動がカギになるであります」
「なら、私達は飛んでいくでござるよ。ソニック殿はどうするでござるか？」
「俺にはこの自慢の足がある。体の事気遣いながら、周りの兵士の一掃だな」
そして、俺たちは砦に向かって行った。

ソニックｓｉｄｅ　ｅｎｄ

エクレールｓｉｄｅ
「（勇者を移動させる、ということには成功した…だが）」
先ほどよりも減ってはいるが、それでも変わらない兵士の群れ。
「（いい加減疲れてきた…増援がほしいところだが、通信手段などまったくない。どうするか・・・？）」
と、いきなり遠くからバカでかい鉄球が飛んでくる。くっ、ゴドウィン将軍のものか・・・
それを無駄に体を動かさないようにして避ける。今の状態じゃ、下手に体を動かすだけで疲れてしまう。うまくコントロールしなければ、アウトだ。
「（こんなことなら、まだ場を整えてから勇者を出すべきだったな）」
そんなことを思っていると・・・突然、上からバカでかい光の刃がすっ飛んできて・・・周りの兵士を薙ぎ払った。

『にゃーっ！』
巻き込まれた兵士が、すべてけものだまへと変わる。一体何が・・・
「遠間より失礼仕った。おお、久しぶりでござるな、エクレール。しばらく見ないうちに大きくなった」
「だ、ダルキアン卿！」
ビスコッティ最強の騎士にして、私の憧れである人の一人・・・ブリオッシュ・ダルキアン卿が、飛び入り参加してきたのである。
「ダルキアン、だと・・・？」
「いかにも。そこの斧将軍殿には、お初にお目にかかるでござるな」
ばっ、とマントを脱いで、その名を言う。
「ビスコッティ騎士団自由騎士、隠密部隊頭領、ブリオッシュ・ダルキアン」
その手に持っていた巻物を広げる。おそらく兄上が伝えてくれたのだろう。
「騎士団長、ロラン殿からの要請を受け、助太刀にまいった」
隣にいたホムラが、すんだ声で雄叫びをあげる。
ふと、塔の上から何かが光った。おそらく・・・弓だ。
「ダルキアン卿！後ろから弓が来ます！」
その声がいい終わるとほぼ同時に弓が飛ぶ。
「紋章剣、列空・・・一文字っ！」
ごうっ、と強い風と共に紋章術が発動し、光の刃となって弓が飛んできた方に向かう。
それは弓を弾き飛ばして・・・その弓を撃った兵士がいた塔ごと切ってしまった。
「・・・やりすぎです」
ぼそりとつぶやいた。
「いやー、助かったでござるよ。エクレール」
「い、いえ！」
「おっと口上の途中でござったな。えっと・・・どこまで話したか？」

「（自由なのは分かっていますけど、忘れるのはいかがなものかと・・・）」
心の中で突っ込みを入れる。
「まあ、ともかく・・・押しかけ助っ人の推参でござる。さあ、いざ尋常に！」
と、ダルキアン卿の背後で花火が上がる。
「勝負でござる！」
にこりと笑って、その言葉を放った。

エクレールｓｉｄｅ　ｅｎｄ

一方その頃、ユキカゼ&リコッタはというと。
「それそれそれー！」
リコッタは先程の火薬を使いつつ、紋章術と組み合わせて大威力の砲撃と花火をぶっ放し、
「はっ、ほいっ、やあっ！」
ユキカゼは体術を行使し、あたりにいる兵士をバッタバッタとなぎ倒していっていた。
ちなみに、先程の花火はリコッタが出した物である。
「にゃーっ！」
「うむ。ここら辺の兵士はすべてなぎ倒したようでござるね」
「なら、砦の中でまた大きな花火を挙げるのであります！」
戦いは、まだまだ続く。

「おっせーなぁ、勇者…」
と、とある廊下で一人の少年がつぶやいていたのは、また別のお話。

第七話：決戦、ミオン砦～ｓｉｄｅ　シンクｅｔｃ　（後書き）

次回予告

「さーて、少し痛い目に会ってもらおうか・・・子猫ちゃんたち？」

「そっちは二人でこっちは三人…負けるはずがあらへんっ！」

「悪いがこっちは急いでいるんだ・・・とっとと終わらせてもらうぞっ！」

ソニック＆エクレールｖｓジェノワーズ、戦いの結果は？

「時間がやばいんじゃないのか？」

「僕が、全速力で飛ばす！」

コンサートの行方はいかに！？

次回、「決着、ミオン砦の姫様奪還戦」。フロニャルドをかけろ、音速のハリネズミ――――

「次回も、全速力で突っ切るでござるよ？」

ゴドウィン将軍に某超戦士の言葉を言わせたのは、なんとなくだったりします。

エクレールとシンクの掛け合いが短いのは、原作とは違ってあの事件が無いからです。事件と言うのは最初の戦闘をアニメで見ていただければよろしいかと。

次回は砦戦の決着です。投稿はお盆を過ぎたあたりになるかと。

次回をお楽しみに。

第八話：決着、ミオン砦の姫様奪還戦（前書き）

長くなりましたが、ミオン砦編決着です。
果たして結果はいかに？

第八話：決着、ミオン砦の姫様奪還戦

第八話：決着、ミオン砦の姫様奪還戦

ソニックｓｉｄｅ

「せいっ！はあっ！」

『ニャーッ！』

剣を振りながら、向かってくる兵士たちをなぎ倒す。まだ体に限界は来ていない。

「（さっきの回復術、結構効いてるんだな・・・）」

まあ、完全に痛みが消えたわけじゃないんだが、それでも楽に動く。

「（シンクたちはもう先に行ってる・・・速くいかねえとっ！）」

少し動くスピードを上げて、さらに歩を進めていった。

そのまま敵を倒していくと、少し開けたところに着いた。

「中庭みたいだな・・・」

敵は周りにはいないようだった。なんか拍子抜けだな『ドーンッ！』

え？

なんかしらの爆発音がした。とりあえずその場所に行ってみる。

「ぜーっ、ぜーっ、ぜーっ・・・」

「さすが騎士隊長とはいえ、三人相手は少しきついようやな？」

ジェノワーズとかいう三人組を相手にしているエクレールがいた。

「エクレールっ！」

「そ、ソニック殿！無事だったのですね」

「まあな。で、そっちはそっちでだいぶやられてるっぽいが・・・」

「ええ。こいつらは頭は「馬鹿」なのですが、戦闘に関しては結構上の方なので・・・」

なるほどね・・・道理でこんなに疲れてるわけだ。

「じゃ、とっととこいつら倒して、お姫様のところに向かいますか」
「ほー、一人増えたとはいえ2対3の状況をくつがえせるっていうんやね」
関西弁・・・だったっけ？そんな言葉で話す虎っぽい女の子。
「そりゃそうだ。今までどんだけ敵と戦ったと思ってる？２０対１なんてざらだぞ？」
ま、人じゃなくて機械とかが多かったけども。
それを聞いて、三人娘は少しぎょっとした顔をした。まあ、当然か？
「さーてと…さっさと倒して、先に進ませてもらう！行くぞ、エクレール」
「了解ですっ！」
「ジェノワーズとして、ここを通らせるわけにはいかんっ！」
バトル、スタート。

Ｍｉｓｓｉｏｎ：ジェノワーズを撃破せよ！

ソニック　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

エクレールｓｉｄｅ

現在、私は斧使いのジョーヌを相手にしており、ソニック殿は短剣使いのノワールを相手にしていた。弓使いであるベールは援護射撃に当たっているが、そこまで気にすることでもなかった。それはなぜかというと・・・
「そらそらそらあっ！」
「くっ！」
右手でノワールを相手にし、もう片方の手の人差指には、小さな紋章を展開したまま戦っている。握りこぶしから人差し指だけを出したような感じの手だ。
時折飛んでくる矢にめがけて、それを向けると・・・

弾丸のように火の玉が飛んでいく。それは見事にあたり、矢を焼く。
「（ここまで紋章術を使いこなせるようになっているとは、さすがだ）」
これなら落ち着いてこっちに集中できる。ならば・・・
「さっさと倒して、終わらせてもらうぞ！」
「それはこっちのセリフや！」
がきんっ！と金属同士がはじける音を響かせ、いったん距離をとる。
「（今までやったことは少ないが・・・やってみるか）」
チャキ、と剣を前に突き出し、紋章術を発動させる。
「（紋章剣ではなく、紋章砲…フロニャ力を打ち出すこと以外にも、できることはある！）」
「そっちがその気なら、こっちも行かせてもらうで！」
あちらも紋章術を展開。だが、近接技ならば・・・
「こっちの方が、断然有利っ！」
きゅいいいんっ、と、空気を引き裂くような音とともに、剣にフロニャ力が収束されていく。
「紋章砲…列空、一閃砲！」
ドンッ！と大砲を撃ったような音。それと同時に爆発的なスピードを加えられた剣が、一直線に飛んでいく。結果として。
「え、ちょ・・・うそやろぉ！？」
ミサイルのように飛んだ剣は、見事に相手にあたり、残ったのは・・・
・
「ふにゃぁ～・・・」
けものだまとなったジョーヌだった。
それを見て、ぺたりと地面に座り込む。
「はあっ、はあっ・・・案外、砲術も悪くないのかもしれんな」
そうつぶやいた。

エクレール　side　out

ところ変わって、ガウルｖｓシンク。
「いいねえ・・・十分客を呼べる腕前だ」
特物が折れたのを確認し、セルクルから降りる。
「だが、もうちょっと派手な技がほしいところだ。俺らの戦は、見せてなんぼの代物だ・・・」
そう言うと、手を上に引くようにして、紋章術を発動させる。
「強さと華麗さ、豪快さ・・・その辺が騎士と戦士の必須事項！」
手を移動させ、技の発動準備にかかる。
「その力が、この『気力』だ！」
そう言い放った瞬間、ガウルの腕と足に光で作られた爪の様なものがついた。
「気力解放！『獅子王双牙』！！」
高く上に飛びあがり、いまだセルクルに乗ったままのシンクを狙う。
「ははっ！」
「くっ！」
シンクはパラディオンを横にして防御態勢をとる。
獅子王双牙が当たったシンクは、大きく体勢を崩し、セルクルから落ちる。
「おらおらおらおらおらあっ！」
さらに連撃を加えるガウル。それを巧みにパラディオンを使って受け流す。だが・・・
「天雷っ！」
気力の玉を放った。さすがにそれは受け切れなかったらしく、上に大きく飛ばされてしまうシンク。しかしただでは転ばない。ゆっくりと体制をとりなおす。
「へっ！」
どんっ、と地面を強くけり、一気に上に飛び上がるガウル。
そのアッパーカットは直撃はしなかったが、シンクの左手のガントレットを破壊した。
だが、まだ終わらない。天井に腕を当てると、さらに紋章術を展開

する。
「爆砕陣っ！！！」
これで決めると言わんばかりに、爪のはえた脚でとび蹴りをかまし、そのまま地面へと叩きつける！
がりがりがり・・・とシンクをボードの様にして地面を滑っていくガウル。
「・・・あれ？」
壁との距離、残り5メートル足らず。結果は？
当然、壁に激突する。見ているこっちからすれば、ちゃんと考えてほしいものだ。
「ぐおおお・・・いってぇ～！」
頭を抱えて唸っているガウル。まあ、あれほどのスピードで壁に激突すれば、誰だってこうなるだろう。
「わはははははは！どうよ？獅子王双牙からの天雷・爆砕陣！街じゃ噂の気力系必殺技だ。へっ、終わったな・・・」
と、すました顔でつぶやく。そのとき。
ドーン！、と何かを破壊する音と同時に、がれきの下からシンクが現れた。
「勝手に終わらすなーっ！」
「あ・・・あれ？あ、いや・・・今のは普通に終わりだろ？なんで立ってんだ、てめえ？化物か？化物なのか！？」
と、右腕にある半分になったパラディオンを凝視する。
さて、なぜここでシンクがこのように立っているかを簡単に説明しよう。
爆砕陣を受けたパラディオンは、見事に半分に折れた。それを瞬間的に頭の下に添えることで、頭部への直接的なダメージを軽減。そして現在に至る。はい、説明終了。
「へっ、こいつ・・・その一瞬でそんな防御を」
と、なかなか見ごたえがあるな、とガウルが思った次の瞬間！
「ぐへ！」

というなにか悪者が倒れたときに出す声と同時に、勢いよくシンクの頭から血が飛び出してきた！
「「やっぱり効いてた！」」
そのままぐるぐるとその場を周回する二人。
「ちょ、馬鹿かおめえ！怪我してんじゃねえか！」
くい、とシンクのマントをつかんで止める。
「異世界人は、けものだまになれねえんだから。あまり無理な耐え方すっと・・・」
その言葉を遮るように、シンクは左右に頭を振る。（血が飛び散ってはいたが）
「いや、余計な心配はノーサンキュー！なんとなく、わかったぞ・・・」
すたすたと、その場から少し距離をとるシンク。
「気力ってのは、こんな感じ！」
紋章術を展開。すると、折れたパラディオンが双剣へと変化し、さらに刃には気力がまとわれている。
「急がないとコンサートに間に合わない！みんなが姫さまの歌を待ってるんだ！」
「へ？コンサート！？」
ガウルは聞いていない、と言った顔をした。
「うおおっ！いっくぞーっ！」
がきんっ、と、双剣といつの間にか出したガウルの剣がぶつかり合う。
「ちょ、待て待て勇者！コンサートって！？」
「どおおおりゃああっ！」
聞く耳持たず、と言った調子でそのまま剣を押す。果たしてどうなることやら・・・

ソニック　ｓｉｄｅ
「っ、ジョーヌ！」

「これで2対2だな。数は同じだ」
「それでも、まだやれる！」
仲間がやられたことにおこったのか、一気に距離を詰めて攻撃を仕掛けてくる女の子。
だが、それゆえに攻撃も読みやすい。簡単にさばくことができた。
「最後は、まとめて吹っ飛ばそうかね！」
両手を銃の様に構え、背後に紋章陣を形成。さらにフレイムリングから炎も吸収する。
「ブーストスラッシュのブースターを、そのまま砲撃として使う大技だっ！」
「そんなもの、撃たせるかっ！」
だが、いまさら近づいてきても遅い。
「紋章砲…『デュアルストームバスター』っ！」
二本の指から放たれた風と炎をまとった風は見事にまじりあい、ブーストスラッシュの勢いそのままに相手に襲いかかる。
「くうっ！」
手前の少女は剣を交差して受け止めようとするが、後ろにいた少女は・・・
「キャーッ！？」
見事に飛んで行った。けものだまになるとはいえ、怪我をしてなきゃいいんだが。
「出力、さらに増加！」
これで終わりにしてやる！
「ぐっ・・・うわあああっ！」
ついに耐えきれなくなったのか、そのまま弓を持っていた少女と同じ方向に飛んで行った。
「ジェノワーズ、撃破完了っと」
Ｍｉｓｓｉｏｎ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅ！

ソニック　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

さて、これからの流れを簡潔に語ろう。
ガウルを止めるためにやって来たレオンミシェリは、ダルキアン卿と勝負してこれに打ち勝った。
それから二人が戦っているところに赴き、簡単な武力制裁を加えてこの戦いの幕を下ろした。はい、二回目の説明終了。
で、現在ミルヒ姫のいる部屋。
「で、これからどうするんだ？コンサートまであと１５分くらいしかないぞ」
「ソニック殿が連れていけばいいのでは？」
「俺もそうしたいところなんだが、さっきの技の反動でうまく体が動かねえんだ。大技は一日に一回にすべきだな」
「じゃあ、僕が連れていく！」
と、元気に手を挙げたのはシンクである。
「どうやるんだ？今からおんぶして走っても、時間通りには到底無理だぞ？」
「大丈夫だって！さっきの戦いで、気力っていう力の使い方も覚えたから。じゃあ、行きましょう姫様！」
「は、はい」
とことこと歩いていく二人。シンクはパラディオンを取り出し、少し力を込めると・・・それは、小型のライディングボードの様なものに変形した。後ろにはブースターらしきものもついている。
「ほー、それで飛んでいくわけか」
「走るよりも断然楽だからね。よーし、姫様、しっかりつかまってね！」
「わ、わかりましたっ！」
ぎゅ、と服を強くつかむミルヒオーレ。
「じゃ、スタートダッシュくらいは俺がやろう」
剣を取り出し、それに風をまとわせるソニック。それを野球のバッ

トを振りかぶるように構えて・・・
「行ってこーい！」
「どわあああああっ！？」「きゃあああああっ！」
某大乱闘ゲームに参加していたソニックのバッティング力は、伊達ではなかった。それにより・・・
見事５分で会場までたどり着いたそうな。

第八話：決着、ミオン砦の姫様奪還戦（後書き）

次回予告

「笑ってろ。そうすればいつかきっと、いい日が来る」

「・・・少し、楽になった。感謝する」

ミオン砦での決戦が終わり、ソニックはレオンミシェリと少し話すことになった。

「カリバーンでござるか？」

「それなら、いい話があるでござるよ」

カリバーンの行方を握っていた隠密部隊。その情報をもとに、ソニックは旅立つこととなる。

次回、『レオ閣下とカリバーンと一人旅』。フロニャルドを駆けろ、音速のハリネズミ――――

「次回も、全速力で突っ切るぜ！」

ソニックの新技も出しました。銃みたいにして使う、というのは元から考えていたので、思いっきり使うことにしました。

最後のバットの振りぬきは、某ゲームのアイテムである『ホームランバット』から。あのふっ飛ばしの威力はすごいですね・・・

では、また次回。

第九話：レオ閣下とカリバーンと旅の準備（前書き）

暇つぶしに自分の小説読んでいたら、なんか筆が進んじゃったので投稿。
次の更新がいつになるかはわかりませんが、できたんだから仕方ない。
ではどうぞ。

第九話：レオ閣下とカリバーンと旅の準備

第九話：レオ閣下とカリバーンと旅の準備

戦いが終わり、シンクとミルヒオーレが何とか無事にコンサート会場に着いたころ。

「星がきれいだねぇ」

ソニックは一人、砦の壁に寄りかかりながらスポーツドリンクを飲んでいた。

すでに兵士たちの手によって残骸などは片付けられており、あたりは穏やかな空気が流れていた。

「何をしているでござるか？」

「ん？」

現れたのはダルキアン卿。一応この二人は初対面である。

「ユキカゼから話は聞いているでござる。何でも相手方の巨大なからくりを一人で打倒したとか」

「まあ、なんとかな。親方様・・・だったか？話は聞いてる」

「ブリオッシュ・ダルキアン。ダルキアンでも、親方様でも構わないでござるよ」

「ソニック・ザ・ヘッジホッグ。ソニックでいい」

二人は軽く握手を交わした。

「そういや、ロランから聞いたんだが・・・『カリバーン』って剣、聞いたことあるか？」

「カリバーン・・・ユキカゼ！情報は何かあるでござるか？」

そう呼ぶと、瞬く間にユキカゼがダルキアンの隣に現れた。

一つの巻物を取り出し、くるくると紙を見て…止まった。

「一応情報はあるでござる。森の奥地…行ってみれば樹海と呼ばれるところに、その剣はあると」

「樹海ねぇ・・・」

「凶暴な魔物、もしくはそれに準ずるものがいるとも聞いているでござる。行く時は、十分に装備を整えてから」
「了解だ」
自分のメモ帳にそれを映してから、礼を言ってソニックはそこから離れた。

レオンミシェリ　ｓｉｄｅ
「ふう・・・」
全く、私の弟だというのに・・・恥ずかしくなってくる。
まあ確かな原因はジェノワーズじゃし、げんこつ一発で済ませた。
「（ダルキアン・・・やはり私より強いな）」
手合わせをして分かった。私が強くなったように、あいつもまた強くなっているのじゃと。
そう思っていると、わずかにミルヒの歌声が響いてきた。おそらくモニターか何かで見ているものがいるのじゃろう。
「・・・待っておれ。私の大切なものとして、絶対に守ってみせるからの」
そう言って、砦から去ろうとしたときだった。
「いい夜だと思わないか？閣下」
「ソニック・・・」
声をかけたのは、ソニックだった。
「そんな暗い顔して、一体どうしたんだ？」
「貴様には、関係ないことじゃ」
そう、少し怒気をはらんだ声で言った。
「おー、怖いねぇ。まあ、俺も深く聞いたりはしないさ。その様子じゃ、よほどやばいことだと思うからな」
「わかってくれると助かる」
少し間が開いた。少し冷たい風が吹く。
「笑ってな」
「は？」

「そんな難しい顔せずに、笑ってればいいのさ。今あんたが向き合ってることがどれだけやばいことかは知らない・・・けど、笑ってればいつかきっと、いい日が来る」
そう、いいきった。その顔は、騎士らしい、しっかりとした顔つきだった。
「・・・ありがとう、少し楽になった」
「どういたしまして。ま、今度会う時は戦場でってことで」
「ふん。負けはせぬぞ？」
「上等だ」
コツン、と拳を合わせ、私はドーマを走らせた。
「笑って、か」
ほんの少し、今までよりも気分がよくなった。

レオンミシェリ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

そんでもって、翌日。
「あー、腰がいてぇ・・・」
「だ、大丈夫？」
昨日の影響か、腰に大ダメージを負っているソニック。治療はしたが、まだ痛みは残っているようだ。
「今日にはいきたかったんだがなぁ・・・明日にすっか」
「そうした方がいいと思うよ。ダルキアン卿からも「準備はしっかり」って言われたんだから」
シンクが心配そうな顔で言う。同じ体を動かすのが趣味としては、体のコンディションの大切さはよくわかっているのだ。
「僕はなんか戦の後の行事に行かないといけないんだけど、ソニックはどうするの？」
「俺はここにいるさ。医者からも「少し動くのはいいですが、なるべく安静にしておいてください」って言われたからな」
「わかった。一応姫様にはそう伝えておくよ」

「よろしく頼む」
そう言うと、シンクは部屋から出て行った。
「・・・ひまだなぁ」
そうつぶやいた言葉は、誰にも聞かれることなく開いていた窓の外に飛んで行った。

ユキカゼ　ｓｉｄｅ
「親方様、これくらいで大丈夫でござるか？」
「うむ。それくらいあれば、旅に事欠くことはないでござろう」
私と親方様は、現在昨日の疲労＋体の激痛で動けないソニック殿のために、旅の準備を代わりに行っていた。
「でも、少し多いような気が・・・」
「備えあれば憂いなし、でござるよ。なにせ、あの場所にはとんでもない『獣』が住んでいるとのうわさがあるでござるからなぁ・・・」
「『迅竜』ですね」
「ああ。それのためにも、できるだけのことはやっておくでござるよ」
「はい！」
と、どこからか小さく欠伸の様な声が。
見ると、そこには窓が開いている部屋が一つ。
「退屈そうな感じでござるなぁ」
「これが終わったら、お茶菓子でももっていくでござるよ」
「よろしく頼む、ユキカゼ」
そう言いながら、再びせっせと準備を再開した。

ユキカゼ　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

式典が終わり、シンク、エクレール、リコッタはソニックの部屋へと向かっていた。

「んっ…やっぱりああいう式典は、緊張するなぁ」
「我々はいつもやっている。もう慣れてしまったから気にすることはないがな」
「でも、エクレは自分が姫様に撫でられるの楽しみにしているのではないでありますか？」
「そ、それはそうだが・・・」
姫様、つまりミルヒオーレは、別名「撫でマスター」と呼ばれ、その手によって頭を撫でられたものはとんでもなく幸せな気持ちになるという伝説がある。
というか、げんにシンクは先程その状態にエクレールがなるのを見ており、少し驚いていた。
そう言葉を交わしながら、部屋の前に着いたのでノックをするシンク。
「誰だ？」
「僕だよ。エクレールとリコもいる」
「いいぜ」
入ると、ソニックは顔を窓の外に向け、空を見ていた。
「空、見てたの？」
「ああ。やっぱりどんな世界でも、空は青いんだな、って思ってな」
「へー」
と、再びドアをノックする音が。
「誰でありますか？」
「ユキカゼでござる。ソニック殿はいるでござるか？」
「いるぜ」
そう答えると、ユキカゼが一つの包みを持ってはいってきた。
「退屈そうな声がしたので、お茶菓子を持ってきたでござる。みんなも食べるでござるか？」
「はいであります！」
「い、いただきます」
「じゃあ、僕も！」

なんだかんだあっても、やはりこの国は平和だったりするのである。

そんでもって、翌日。

「よし、じゃあ行ってくるぜ！」

「気をつけてね、ソニック」

「くれぐれも、怪我には気をつけてください」

「わかってるよ」

朝、ソニックはセルクルに荷物を載せ、目的の樹海に向かおうとしていた。

疲労は昨日の内に回復しており、ダメージもほとんどなくなった。

というのも、体の事を気にしていたミルヒオーレがシェフたちに、

「すぐに元気になる料理を作ってください！」とお願いしたところ、とんでもなく回復する料理がソニックにふるまわれ、そのおかげで旅に行ける状態まで回復したのだ。（どんな料理かはご想像ください）

「必要だと思う荷物はすべて積んでおいたでござる。通信機も積んであるゆえ、いざという時は連絡するといいでござるよ」

「助かるぜ、ダルキアン卿」

「後、これを持っていくといいでござる」

「ん？」

ダルキアンに渡されたのは、一つの巻物。

「樹海についての情報を、知っている限り積め込んでおいたでござる」

「おお、本当に助かるぜ」

それを腰のポーチに入れ、セルクルにまたがるソニック。

この前の様に緊急事態で、なおかつ荷物を持っていない状況なら彼一人で行けただろう。

しかし今回は一つの旅に近い。そう言うわけで、足は使わずセルクルで行くことにした。

「じゃ、行ってくる！」

「気をつけてねー！」
大きく手を振るシンク。それにこたえるように、ソニックは後ろ手で手を振った。

第九話：レオ閣下とカリバーンと旅の準備（後書き）

次回予告
「こいつが・・・迅竜！」
「ぐるるるる・・・」
樹海の中に入り、とある一匹のモンスターと出会うソニック。
そのモンスターの二つ名は・・・『迅竜』。
「どちらが早いか、勝負だっ！」
スピードｖｓ　スピード。果たして勝者は！？
次回、『激突、ｖｓ迅竜！樹海でのスピードバトル』。フロニャルドを駆けろ、音速のハリネズミ――――
「次回も、全速力で突っ切るぜ！」

更新するかどうか分からないのに次回予告。
まあ、気分ってことで。
おそらく年内の小説の更新はこれがラストかと。
ではではー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1167u/

DOGDAYS～音速のハリネズミ、フロニャルドを駆ける～

2011年12月17日18時49分発行